

# 花園に住む兎

ENDLICHERI

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

花園（ランド）には、2羽の兎が仲良く暮らしていました。

この作品のあり得なかつた可能性の世界はこちら。

<https://syosetu.org/novel/198416/>

# 目次

朝のイベント	1
朝食の雑談	6
夏休み中に	11
怒ると・・・	19
キラキラ夏祭り!	26
兎は寂しいと死んじゃう?	36
ハッピーハロウィン!(?)	41
祝わないと・・・	48
慣れの恐ろしさ	53



# 朝のイベント

?「・・・・・・・・・・て、・・・・・・・・・・きてー!」

何か声が聞こえる。瞼を閉じているのに、少し眩しさを感じる。ってことは……：……まあ定番のごとく朝か。まあ、こういう小説では定番だよな。いずれ彼女となる女の子が朝起こしに来るってド定番なシチュエーション。

?「・・・・・・・・・・きて、起きて!」

・・・・・・・・・・眩しいから目が開けにくいんだけど、なんか、開けたくない。この声が誰なのか俺には分かる。・・・・・・・・・・いや、分かってしまう。

?「起きないと、キスしちゃうよ?」

マジか!?それは阻止しないと!・・・・・・・・・・嫌がる理由?今から目を開けて理由を説

明するから！

? 「ん……。」

? 「あ、起きた。」

みんなならどうする？ 目を開けるとウサギの顔がドーン！とあつたら。

? 「どお？ 『朝からオツちゃん』。」

? 「……。」

そんな技名みたいに言われても、こっちは黙るしかない。

キスのお相手が、このウサギなんだぞ！ お前ら『ヤッター！』つてなるか!? どうせならないだろ!?! ……独断と偏見だけど。

? 「とりあえず、どいてくれ。起きるから。」

? 「はーい。」

そろそろ自己紹介しますか。俺の名前は『宝生唯兔』ほうじょうゆいと。……中々な名前だろ？物心ついた時からこの名前を言うのに若干抵抗が出始めたんだ。もちろん、漢字の方が。

？「オツちゃん、キス出来なくて残念だったね。」

朝早くから他人の部屋にウサギ連れてきて、部屋主とそのウサギをキスさせようとす  
るこのバカ娘の名前は『花園たえ』はなぞの。コイツは隣の家に住んでいるけど、コイツとは中学  
までほとんど絡まなかった。……結果、『幼馴染』ではないな。

唯兔「えつと……、たえさん？」

たえ「おたえ。」

コイツ……!!

唯「……おたえ、部屋から出ていってくれないか？」

た「？……はっ！私、邪魔なの？」ウルウル

唯「……………うん、邪魔だね。着替えるのに。」

た「……………うん？」

唯「着替えたいから外出ろって言ってるの!!」

た「……………ああ！」

もう蹴つ飛ばしてでも部屋から出ていってもらおうかな!?

た「大丈夫。」

唯「何が？」

た「誰にも言わないから。」

はあ……………。

た「あれ？唯兔？」

呆れて何も言えなくなったから、ウサギを抱えてるコイツの首根っこ掴んで部屋の外に放り投げた。

た「あ〜れ〜〜!」

投げられながら遊ぶんじゃねえよ。

着替えるだけなのになんで約1000字くらいかかるんだよ。．．．．．紹介文を除くとまだ900字くらいだけど。でも、ようやくのんびり着替えれる。

た「まだー?」

唯「なんでまだそこにいるんだよ!」

これが今日だけじゃないって言ったら、どう思う?．．．．．俺はごめんだよ。朝からツツコミすぎて疲れるから。

## 朝食の雑談

着替え終え、顔を洗いに部屋の外に出れば、

た「あ、やつと出て来た。」

・・・まだいたか。リビングに行けばいいのに・・・。

前回、『たえとは中学までほとんど絡まなかった』って言ったが、中学3年の3月くらい、近くの公園で不良共に絡まれてたコイツを助けた後からまるで幼馴染かのような感じになっていた。

唯「そうだ。お前朝食は済ませたのか？」

た「ううん、まだだよ。」

唯「普通済ませてから来るだろ・・・？」

た「でも、うちのお母さんと唯兔のお母さんに話したら、喜んで『オツケー!』って言ったよ。」

親の方は繋がりあったからなく。 . . . . あれ?うちの母さん、朝早く仕事に行くって言ってたよな?

唯「. . . . . なあたえ?」

た「お・た・え!」

そこまでして呼ばせたいか!!

唯「. . . . . おたえ、お前いつから家にいた?」

た「うーん . . . . . 唯兔のお母さんが出掛ける20分前だったよ?」

唯「なんで疑問系? つかその時間結構早いぞ!」

た「だから空腹も限界なんだよ。」

唯「作れってか!?!」

仕方なく2人前の朝食を作ることになった。……正確には『なつてしまった』が正解だけど。

た「唯兎は今日予定あるの？」

唯「うーん……、特には無いと思う……。」

た「じゃあどこかお出」

唯「あ！1つあった。」

た「……何？」

なんでふてくされるんだよ……？

唯「学校の休日課題。今日中に終わらせないと。」

た「……ぶうぶう！」

ウサギと一緒に鳴くんじゃないよ。つてかまだウサギいたのかよ!?

唯「悪いけど、そろそろウサギ帰ってきてくれる？」

た「……………ぶうぶう。」

だから、鳴くなつて！

た「……………分かった。」

お！納得してくれた。

た「こつちの兎は帰してくる。まだ兎はいるし。」

……………なんか含みのある言い方だな。

たえが「お・た・え!!」……………おたえがウサギを帰している間に朝食が完成した。

た「ただいま。」

唯「お前の家じゃない。後、ナレーションに割り込むんじゃないよ。」

た「そういうのはナレーションで言わないと！」

ナレーションに割り込むなよ。……これで良いのか？つづうか、なんでた……  
おたえに指摘されなきやいけないんだよ!?

た「全く、唯兔は困ったさんだな。」

唯「そんなこと言うならお前の朝飯、パンと牛乳だけにするぞ。」

た「でも、寂しいんでしょ？兔なんだから。」

唯「お前もう水道水だけな。」

た「待って〜！お慈悲を〜！」

ただ朝食を食べるまでで1000文字も書かないといけないんだよ!?

## 夏休み中に

世間的にはもうすぐ夏休み。

た「夏だね。」

唯「そうだね。」

夏休みと言えば！

た「・・・・・・・・私がいるのになんで勉強してるの？」

唯「じゃあなんであなたは宿題してないの？」

た「・・・・・・・・ぐー。」

おい。初っぱなの時のりみイベの星4セリフを出すなよ。

夏休みと言えば辛くて、多い宿題だろ!? これでも、俺は早く終わらせる方だ!

唯「学校違うけど、お前だつて宿題あるだろ?」

た「大丈夫!」

唯「……この後俺がツッコむのは予想がつくけど、一応理由をどうぞ。」

た「ポピパのみんなでやるから!」

唯「それは絶対進まないやつだな!」

ほーれ! ツッコんでしまった!!

た「どっか行かない?」

唯「唐突だな!」

た「良いでしょ? 恋人なんだし。」

唯「いつなった!? 俺とお前はそんな関係じゃない!」

た「そんな……、私とは遊びだったと言うの!」

唯「お前そのセリフ外で絶対言うなよ!!」

あれ?・・・。会話が脱線してた。

唯「とにかく、今日こんだけの宿題を終わらせるから外出は無しだ。」  
た「ぶうぶう!」

お前んとこのウサギみたいに鳴くな!頬を膨らませて・・・。

唯「うるさいから、ギターでも弾いてろ。」  
た「分かった!」

なんか、笑顔で自宅に帰ったよ・・・。

あ、そういうやもう昼飯の時間か。飯何にしようかな・・・?

た「ただいま!」

なんで戻ってきた!?

た「え？だって『ギター弾いて待ってる』って言わなかった？」

唯「言つてない!!」

た「お昼ご飯何？」

唯「人の話を聞きなさい!!」

そんなこんなでお昼ご飯は作者もこの時期よく食べたがってるそうめんになりました。

作「そんなこと言わんでいいわ!!」

さて、作者いじりもこの辺にして、昼食を食べ終えた後のお話。

た「ねえ？」

唯「外出はしねえよ。」

た「そつちじゃなくて、恋人の話。」

あれ？そつち？つてか、それさらつと流したと思つたけど？

た「私が恋人じゃダメ？」

唯「……………ああ、ダメだ。」

た「……………理由は？」

唯「え？」

た「理由が知りたい。私が唯兔の彼女になれない理由が。」

……………出来ることなら言いたくないけど、

唯「俺はお前のことをほとんど知らない。お前は俺のことを色々知ってるみたいだけ  
ど」

た「知ってる。」

唯「……………うん、話してる最中に言うくらいだからな。でも、俺はお前のこと  
を知らない。そんな奴が彼氏で良いと思いますか？」

た「だったら、私について知ってること言つて。」

唯「……………うん、何故？」

た「どれだけ知ってるか確かめるため。」

うわく……、目がマジだ……。

唯「えつと……、ギターが好き。」

た「うん。」

唯「ウサギが好き。」

た「うん。」

唯「マイペースで天然。」

た「……うん。」

間を作るな。事実だ事実。

唯「そして、綺麗（黙っていれば）。」

た「……何か言えないこと言った？」

唯「ううん、言っていない。」

いやだって事実だし。

唯「ご覧の通り、俺はお前の表面とか、分かりやすいところしか知らない。だから、恋人には」

た「充分だよ。」

唯「……え？」

た「それだけ知っていれば充分だよ。後は、恋人になった後に知ればいいよ。」

唯「たえ……。」

た「お・た・え!!」

唯「今言う!?!」

確かに、たえ……じゃない。おたえのことを最近意識しちやってるけど、なっ  
ていいのか？

た「私と付き合ってください。」

大胆告白来たよ!?!

唯「……………俺でよければ。」  
た「……………!ヤッター!」

でも、コイツと一緒にの方が楽しいかもしれないしな。

た「つてことで、夕飯ハンバーグね!」

……………おめでたい頭だな、ホント!!

怒ると・・・

た「プール行こ！」

唐突の発言。・・・・まあ付き合って1年経つからなんとなく慣れたけどさ。

唯「・・・・何故その発言をするのか、理由をどーぞ。」  
た「ポピパで行くから！」

だったら5人で行きなよ!!

唯「・・・・いいかバカ。」  
た「うん。」

あ、認めた。

唯「ポピパは女子5人だ。その中に男がいると・・・・・・・・分かるだろ？」  
た「・・・・・・・・ん？」

分かんねえか・・・。

唯「例えば、女子の団体の中に男子が1人だけいたらどう思う？」

た「うーん・・・・・・・・、楽しそう！」

唯「さ！この話は終わりだ！」

それから1週間後・・・・・・・・。

香「プールだよー！」

有「コラ香澄！はしやぐなよ！」

唯「あちー・・・。」

り「唯兔くん、大丈夫？」

沙「結局、連れてこられたんだね・・・。」

はい、そうです・・・。

た「ウサギは寂しいと死んじゃうから、連れてきた。」

唯「テメエ・・・！」

その節は嘘だったって記憶してるけど、このバカはそんなの知ってこつちやないだろうなあ。

唯「それより良かったのか？」

た「何が？」

香「ゆー君、何かあるの？」

唯「ごめん、バカ共には聞いてない。」

沙「じゃあ・・・私が答えれば良い？」

唯「うん、あなたに是非答えていただきたい。」

バカ2人がシュンってしてる・・・だからと言ってどうすることも無いけど。

唯「ポピパの中に俺いて良かったの？」

沙「うーん・・・普通に考えるとちよつとね・・・」

ハハハ・・・、でしようね。

沙「でも、唯兔なら問題ないよ！」

笑顔で言われても・・・、ドキドキしちやう！

た「・・・」ゴゴゴゴゴ

!?. . . . ヤバい！たえから凄いいオーラが. . .!!

た「唯兔。」

唯「な、何. . . ?」

た「ハザードって、カツコイイけど一定時間経つと行動が怖いよね？」

唯「いきなり何言い出すんだ!？」

た「何って、兎繋がりで。」

この人の方が怖い！

沙「おたえ、唯兔なら取らないから安心して。」

た「. . . . .ならよし。」

メンドクサッ！

さて、時間は. . . . .数分経ち、俺は1人更衣室の前にいた。

香「おっ待たせ〜！」

り「待たせちやつてごめんね？」

はい、全員集合ー。

た「どお？似合ってる？」

唯「ああ、似合ってるよ。」

・・・思ってたより綺麗で、スレンダーだな。・・・ってマズイマズイ

！マジマジと見てたら色んな奴に殺されそう！

た「それじゃあ、行こ！」

沙「頼んだよ、ボディーガードさん！」

唯「ボディーガードって・・・。まあいいや。」

とにかく、来たからには楽しみますか！

香「有咲く！」

有「コラ！くつつくな！」

・  
・  
・  
・  
この光景見飽きた。

# キラキラ夏祭り!

た「夏祭り行こ！」

はい出ました！恒例の『唐突発言』！

唯「どうせポピパで、だろ？」

た「!?……………エスパ―？」

唯「お前が唐突に言うつてことはだいたいそうだろ？」

お前か……………香澄がだいたいの犯人だしな。

唯「で、夏祭りつていつだっけ？」

た「今日。」

唯「……………？」

今16時。 . . . . . しかも、今日？

唯「それってさ、『今から支度して行くぞ』って意味だよな？」

た「. . . . . そうなるね。浴衣に着替えてくる〜。」

唯「もう少し早く言えー！！」

. . . . . 定番とはいえ、毎度イベントの度にこれだと正直しんどい。

さて、時刻は変わり. . . . . 場所も変わり、現在夏祭り会場。

香「今年は6人で夏祭りだー！」

た「おー！」

唯「. . . . . 元気ね。」

沙「唯兔。」

唯「ん？」

沙「心火を燃やして. . . . . 出費する覚悟、ある？」

唯「無いよ。」

お前らどんだけ俺に払わせる気だよ!?

沙「私たち、全員の浴衣姿でもダメな」

唯「ダメ。」

沙「……………最後まで言わせて。」

この夏祭りですべて俺が払うになったら、香澄、たえ、りみ（飯メイン）がどんだけ要  
求するのか……………想像したくねえ。

香「みんなー!早く行こー!」

有「ちよっ!?香澄、引つ張んなー!!」

り「香澄ちゃん、待ってー!」

……………アイツ、金あるよな?バカ共はアイツに……………、

た「……………行こ？」キラキラ

……………有咲、コイツも持って行ってくんない？

沙「有咲、花火の時間にはあの場所集合だよ！」

有「分かっている！」

沙「……………さて、私たちも楽しみますか？」

た「うん！」

あつちは香澄、有咲、りみの3人。俺の方はたえと沙綾の3人で行動することになった。

唯「最初、香澄が『6人で夏祭り』って言ってたよな？これじゃあ、意味無い気がするんだが…………？」

た「大丈夫！」

唯「何を根拠に…………？」

沙「どうせすぐまた集まるから。」

唯「……………」

その答えはすぐに分かった。

香「さーやー!!」

沙「ほらね。」

苦笑いすんなよ……。

香「みんなで射的しない？」

た「いいね〜!」

唯「……………有咲、大丈夫？」

有「はあ……………はあ……………大丈夫に、見えるか……………」

唯「……………うん、見えない。」

射的の屋台に来た俺たちは各々で射的を始める。そして、たえと俺の出番になった。……………他は省略だよ!

香「おたえー！ゆー君なんてボツコボコだー！」

唯「お嬢さん、それはケンカの時のセリフだからね。」

り「えつと……、唯兎君！応援してるね！」

た「え？……りみ……？」

沙「おたえ、射的での話だから。」

有「……結構疲れが……。」

おつでーす。

た「すう……。」

唯「ふう……。」

これが意外と接戦で……よく分からん審査の結果引き分けでしたとき。

そして、

香「たーまやー！」

た「たーまやー!」

有咲が見つけた絶景ポイントで花火を見ていた。

唯「……………なあ、」

有「なんだよ?」

沙「どうかした?」

唯「ここって、ポピパしか知らないところだろ?俺がいていいのか?」

沙「いいんじゃない?」

有「おたえと付き合ってたんだ。そんなくらい良いだろ。」

……………心が広いことで。

り「ねえ唯兎君。」

唯「ん?」

り「そこから屋上に上がれるから、おたえちゃんと行ってきたら?」

唯「良いけど……………ハシゴでかよ。浴衣の奴に危ないことは」

た「唯兎く、早く〜！」

唯「……………もう上がってるから行ってくる。」

ハシゴを使い、屋上に上がる。

唯「お前早いよ……………」

た「綺麗だね。」

唯「聞いている？」

ホントマイペースだな……………とりあえず、ちよつと間を開けて横に座る。

た「……………」

唯「静かに寄るなよ。」

た「ダメ？」

唯「……………ダメじゃないけど。」

いつも部屋でコイツと寄り添って俺の肩に頭を乗せられてるけど、今回はちよつとド

キドキする。

た「……………キスしたい。」

唯「唐突だね。」

た「なんで？ムードは完璧だよ。」

唯「今の発言で台無しだ。」

た「いいから、ん！」

唯「……………っ。」

目を瞑ってキスの構えすんなよ……………。

唯「……………。」チュツ

引けなくなってキスをした。

た「ふふっ、しちやったね♪」

唯「……………もう人前ではしないからな。」

た「分かった。じゃあ、帰ってからね♪」  
唯「……はいはい。」

定番のセリフだけど、花火よりおたえの方が綺麗だった。

## 兎は寂しいと死んじゃう？

もうすぐ8月も終わるのに、まだまだ暑い日が続くそんなある日。特に予定も無い俺はのんびり自宅のソファでくつろいでいる。

た「ふくん、ふふふくん♪」

「……………1人と思ったでしょ？説明しよう！朝起きたら横にこいつがいたのだ！……………このバカの頭部に拳骨をプレゼントしたのは内緒だが。」

唯「ねえおたえさん。」

た「な〜に〜？（♪）」

唯「リズムに乗せて言わないの。……………なんでここでミニアンブ持ってきて弾いてるの？自分の家で弾きなよ。」

た「……………唯兎の家で弾いてるけど。」

唯「うん、ごめん。『自分の家』って『おたえの家』って意味で言ったんだけど。」

た「分かってたよ。」

唯「ほおく？」パキパキ

た「ひっ!?!」

俺が指をパキパキ鳴らすと、おたえはまだ朝の痛みが残っているのか、頭部を咄嗟に隠した。

唯「まったく、俺の家で弾く必要は無いでしょ? . . . . . 親いないんだっけ?」

た「うん。」

唯「ハア . . . . .」

それじゃ、こいつがここにいってもおかしくないな . . . . . 納得しちやいけないんだらうけど!

た「唯兎、知ってる?」

唯「ん?」

た「兎って寂しいと死んじゃうんだよ。」

唯「それはガセだ！」

た「……………あつ！」

なんだ『あつ！』つて？なんか変なことでも閃いたのか？

た「私<sup>ウチキ</sup>って寂しいと死んじゃうんだよ。」

唯「だったら中学までの生活はなんだつたんだ？」

た「……………もう太刀打ちできない！」

唯「諦めなさい。」

た「むう〜！……………私がここにいるのはダメ？恋人なのに。」

唯「ダメじゃないけど……………」

た「だったら側にいるね♪」

ギターを置いて、おたえは俺の肩に頭を乗せた。

た「ねえ唯兎。」

唯「うん？」

た「千聖先輩、彼氏がいるらしいよ?」

唯「確信無い噂は広げるよ。」

た「ぶう〜!・・・じゃあ、Afterglowの美竹蘭に彼氏がいるのは?」

唯「うん、知ってた。」

た「え!?!」

唯「その彼氏と今年同じクラスになって、仲良くなった。」

た「ウソでしょ!?!」

唯「お前の千聖さんの話よりかは確信あるんだけど。」

そんな会話をしていると、ふと睡魔に襲われてきた。

唯「ふわあく・・・。」

た「眠いの?」

唯「うん・・・。昨日夜遅くまで勉強して、て・・・。」

その瞬間、俺の意識は途絶えた。



ハッピーハロウィン！（？）

た「トリックオアトリート！」

唯「……………急になんだよ？」

突拍子のない発言がまた始まった…………。

た「だーかーらー！トリックオアトリート！」

唯「……………お菓子なら冷蔵庫の横にあるぞ。」

た「わーい！」

あ、行くんだ。それじゃ、今回おしまいです。さよならー！

た「ちよつと待ったー!」

唯「なんだよ、今終わったと思つて挨拶までしたのに……。」

た「100文字しか書いてないよ!?!それにハロウィンだよ!?!」

唯「うん、ハロウィンだよ?」

た「楽しまない!」

唯「……原作で散々楽しんだでしょ?パレードとか。」

た「あれはあれ、これはこれ。」

唯「でも、ハロウインを満喫したんだろ？」

た「うん！」

唯「はい、それでは皆さん、またいつかー！」

た「だーかーらー!」

またかよ・・・。

た「まだ300文字だよ!?!」

唯「ごめん、それは作者に行ってくる? 発想の乏しい作者に。」  
た「後で言う! それより、ハロウィンっぽいことしようよ!」

ハロウィンっぽいことって・・・。

唯「・・・・・・・・例えば?」

た「うーん・・・・・・・・、仮装?」

そう来ますか・・・・。木曜日の学校終わりのこの時間にそれが来ますか・・・・。

た「……………ダメ？」ウルウル  
唯「却下。」キツパリ

世の中の男共は女子の上目遣いに弱いようだが、どんな理由でもそれが効くと思うな。

た「ぶー……………じゃあ歌って！」  
唯「はい!？」

ハロウィンっぽいことならまだしも、いきなり『歌え』って……………。ここまで来ると病院行きが確定だな。

た「だって、有咲には歌をプレゼントしてたのに…………。」  
唯「……………ん？ごめん、いつの話？」  
た「この前の有咲の誕生日に。」

……………ああ！この小説の目次にあるリンク先の小説でのことを言ってるのか

!(※宣伝です)

唯「……………って、あれはこの小説には含まれない内容だぞ!」

た「でも、あつちにはこの作品のタイトルがあるよ?」

唯「あつちはあつちで、『この小説のあり得たであろう可能性の話』をしてるんだよ!」

(※宣伝です)

た「だったらこつちでも歌ってくれるよね?」

唯「歌わねーよ!」

た「答えは聞いてない!」

唯「聞け!人の話を!」

どつかで聞いたセリフだな……………。

とにかく、……………今の今までハロウィンっぽいことしたか?

た「むゝ。」

唯「……………ハア……………仕方ない。」

うるさい子供おたえを黙らせるがために冷蔵庫に隠していたあるものを渡す。

唯「おい、おたえ。」

た「？」

唯「『トリックオアトリート』って言ったろ？」

ちよつと高いチョコレート。本当は自分へのご褒美として買ったけど、遅かれ早かれおたえには見られていただろう。

た「……………は！バレンティン!？」

唯「『は！』じゃねーよ。それに、お前さつき『ハロウィン』って言っただろ？」

た「お返し、考えておくね！」

唯「人の話を聞きなさい！」

後日、このチョコレートのお返しに変なのだったって話は……………気持的にしたくない。

## 祝わないと・・・

本日はお日柄も・・・良いか知らんけど。だって前日に書いたし。前書きでもあったように、おたえの誕生日。そのせいか、

た「ふんふん♪」

朝からべったりくつついてます。

唯「おたえ、そろそろ学校行く時間だぞ？」

た「やだ。」

ガキか？

た「まだ祝われてない。」

唯「え？・・・さつき言ったぞ、『お誕生日おめでとう』って。」

た「違う。」

朝からテンションがおかしいのはそれか？俺も学校あるからのんびりしてられないんだよ。

唯「じゃあ、おたえ様はどんな祝われ方をご所望で？」

た「作者がよくやってるやつ。」

今日はメタ発言が多いなー。(初っぱなはお前や!!)

唯「作者が？……………ああ、『祝え!!』ってやつ？」

た「そう！」

えー、恥ずかしー。

あれ大変なんだよ。ロード画面のバンド説明とか全部見てその中の良いフレーズを集めて書いてるんだから……………って、作者が言ってます。

た「さ、言っつて！」

唯「いやいや、『言っつて』って言われてもすぐに出ないって・・・。」

た「なんで？ここに台本もあるのに。」

唯「え？・・・本当だ。」

なんか、そこそこ分厚い本が置いてあるんだけど!?

唯「仕方ない・・・って、朝からこれやるの？」

た「さあ、Come on！」

『Come on!』じゃないって!・・・はあ、やるか。

唯「祝え!!自らの気持ちを音楽で奏で、多くの人に希望を届けるバンド!その名は『Oppin' Party』!そのリードギター:『花園たえ』の生誕の日を!!」

た「おおく!さすが主人公く!」

・・・もう終わりにしたい。

た「ダメだよ。まだ700字すら達してないから。」

唯「……本当に今日はメタ発言が豊富だね。これは必ず誰かに怒られると思うよ。」

た「誰って……もしかして作者？」

唯「いや……読者か、最悪運営に。」

た「運営さんが出て来たらマズイね。……メタ発言の注意つてあるの？」

唯「知らねーよ。」

……だからといって、もう話のネタが無いんだよな。つて作者からの伝言です。

た「そういえば、今日(12/3)の作者はご機嫌だね？」

唯「当たり前だろ？ 今日(12/4)は作者の好きなアーティストの新曲の発売日なんだから。『Take me to……』でも言つてたし。」

た「1ヶ月ほど前からTwitterで音源探してはそれをずつとりピートしたもんね。」

唯「今では1番は完璧に歌えるんだと。」  
た「・・・・・・・・あ、1000文字達したね。」

散々本作とは関係ない作品を宣伝してたけどな。

唯「よし！すぐに学校このエピソードを終わらせるぞ！に行くぞ！」  
た「おー！」

## 慣れの恐ろしさ

『天然』という言葉は素敵な意味もあれば嫌な意味もある。食べ物の天然はとても素晴らしいと思える。特に刺し身とかは本当に素晴らしいと思う。

でも、人に対して言われる『天然』は良いイメージがない。なんせ、『天然の化身』が隣にいるんだから。．．．いや、今は隣にいないけどね。

唯「．．．．．ねえ、おたえ。」

た「何？」

唯「君、高2だよね？」

た「うん。」

唯「恥ずかしくないの？」

た「うん、大丈夫。」

唯「そう……。」

おたえはある列に並んでいる。周りを見ると、その列に並んでいるのは子供しかいない。これで察するだろ？高身長の高校2年生が子供に混じって並んでいるのがなんなのか……。

？「はーい！みんな、ちゃんと並んでねー！ミッシェルは逃げないよー！」

そう、商店街の人気者にして、異色バンド『ハロー、ハッピーワールド！』のDJ担当のクマこと『ミッシェル』だ。正式名称は『ミッシェル』というキグルミを着た『奥沢美咲』。まあ、読者なら常識だろうけど。知らない人は……なんでこの小説開いたの？

唯「まったく、周りを見て少しは羞恥心を持ってもらいたいよ。周りみんな小さい子供……だよ??？」

た「どうしたの？」

唯「おたえ、お前いつの間に俺に覚えい剤飲ませた？」

た「さすがに廃人にしてまで仲良くしようとは9割思っていないよ。」

唯「そこは10割でしょ……。」

た「何か幻覚でも見えるの？」

唯「うん。列の後ろの方にさ、小さいけど幼稚園や小学生ではない、中学3年生か高校1年生ぐらいの子が並んでるんだよ。」

た「どこ? ……あ、ましろちゃんだ。」

唯「知り合い？」

た「うん。最近バンド始めた子だよ。」

唯「へえ。同類がいて良かったな？」

た「うん?」

少々哀れ<sup>あわ</sup>みを込めて言ってみただけど、この（悪い意味で）天然記念物には聞こえてないんだろうな……。

ミ「こんにちは。」

た「ミツシエル!」

唯「……奥沢さん、なんかすみません。」

美「まあ、慣れちゃってますから大丈夫ですよ。」

唯「凄く失礼なこと聞いていい？暑くないの？」

美「これからキグ<sup>ミツ</sup>ル<sup>シユル</sup>ミがとても辛い時期だから、今はまだ平気ですよ。」

唯「そうなんだ・・・。」

美「慣れつつ怖いですよ。」

唯「うん、なんとなく分かる。」

美「へっ？それってどういう・・・ああ、そういう事。」

唯「察した？」

美「察しました。ほんと、ポピバもあなたも大変ですね。常識人は特に。」

唯「そう、そうなの・・・。」

た「何話してるの？」

唯「なんでもない。それじゃ、俺たちは帰るよ。」

美「はい、お気を付けて。」

唯「奥沢さんも。」

ミ「それじゃあ、またね。」

・・・あんな会話した後にようそのキャラにさらっと入れるな？感心するわ。

た「ところでさ、美咲と何話してたの？」

唯「うん？……慣れって怖いなって話。」

た「慣れ？……ああ、私にも分かるよ。」

唯「本当か？」

た「うん、オツちゃんたちのお世話をしてると——」

今度、奥沢さんとお茶しようかな？異常な人たちとの接し方のコツを聴きながら。